

# 聽覺障害部門

(第 33 号)

平成 22 年度県立特別支援学校における授業改善プロジェクト  
— 子どもの生きる力を伸ばす授業改善～見る・聴く・感じるを通して～ —

1 テーマ設定の理由

今日の子どもたちを取り巻く社会環境は大きく変化している。学校教育の中でも特に特別支援教育が推進され、その理念の共通理解が進むと同時に、一人一人の障害の実態やニーズに基づいた実践が行われている。

改訂された学習指導要領には、21 世紀の知識基盤社会化、グローバル化がいわれ、その社会において重要視されるのは、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を重視した「生きる力」とされている。特別支援学校においても、同様に「生きる力」を育てることが大きな目標といえる。このことから、聴覚に障害のある幼児児童生徒が自己の持つ能力や可能性を最大限に伸ばし、生きる力を育むために、障害による学習上又は生活上の困難を克服するための教育活動を展開することが重要であり、教育活動の中心となるのが、日々の授業であると考えらる。

本校には、幼稚部から高等部まで幅広い年齢の子どもたちが在籍しており、一人一人の実態に応じた授業の実践を考えた時、系統性を持たせた授業の取り組みが課題として挙げられる。そこで、私たち教員の専門性の向上を図るという視点も合わせながら、子どもたち一人一人の教育的ニーズや実態を十分に考慮し、社会で自立できる生きる力の育成を目指した授業改善を進めたいと考え、このテーマを設定した。

2 研究の内容

- (1) 幼児児童生徒一人一人の実態把握の方法を探り、実情にあった授業の実践に取り組む。

全体では、子どもたち一人一人の聞こえの状態とコミュニケーション手段の確認を行い、聴覚障害に関する基本的な実態の共通理解を図ることとした。

幼稚部では、言語獲得へのアプローチにおいて、聴覚活用、コミュニケーション、発音発語、言語指導等の領域を設定し、それぞれの幼児の実態に基づいた保育活動や個別指導に取り組む。

小学部では、教科指導における学習のつまずきや授業場面等でみられる態度や姿勢の落ち着きのなさなどの要因を客観的な検査を通して明らかにする。また、授業を構成する様々な要素の分析や教科指導にいかせる実態把握の方法を研究し、それに基づいた効果的な授業の在り方を探る。

中学部・高等部では、実際の授業場面における生徒の実態を探る観点を設定して課題を明らかにし、それを基に分かる授業を展開するための具体的な方法を探り実践する。

- (2) P D C A サイクルに基づいた授業研究や校内研修を行い、教員一人一人の専門性の向上に取り組む。

全学部でフリー授業参観を設け、相互の授業評価をもとに全教員が指導案を立て、年間 3 回の研究授業を行う。また、公開授業等を実施し、外部講師からの指導・助言を含めた授業研究を継続的に行い、授業改善に取り組む。

授業や実態把握にかかわる研修を部単位や全体、教科会等のいろいろな形態で実施する。

### 3 研究の方法

#### (1) 学校全体での取組

##### ア 全体研修

全体研修は、以下のような計画で実施した。

表1 全体研修の計画

月 日	内 容	講師・担当
4月22日(木)	研究の進め方	研修課担当
5月10日(月) ～5月18日(火)	フリー授業参観・ 略案授業の実施	
6月 8日(火)	全校授業研究会	幼稚部
6月11日(金)	第1回 公開授業研究会	国立特別支援教育総合研究所 企画部総括研究員 藤本裕人先生
7月30日(金)	自立活動研修会	自立活動担当者
9月 7日(火)	全校授業研究会	小学部
11月 2日(火)	全日聾研出張報告会	全日聾研参加者
11月 5日(火)	全校授業研究会	高等部
11月26日(金)	第2回 公開授業研究会 (焦点授業)	国立特別支援教育総合研究所 企画部総括研究員 藤本裕人先生 (中学部)
12月13日(月) ～12月17日(金)	学校公開週間・ 略案授業の実施	

##### (ア) 全校指定の研究授業及び授業研究会の実施

幼稚部・小学部・中学部・高等部の各部代表各1名の研究授業及び授業研究会を年間4回行った。研究授業の際には、参観者に『授業参観シート』(表2)と『授業評価の観点』(表3)を配布し、授業の評価を行った。

##### (イ) フリー授業参観

それぞれの教員が2つ以上の授業参観を行った。他学部の授業参観をする機会を作った。『授業参観シート』(表2)を記入することで、授業者に授業の評価が分かるようにした。

##### (ウ) 全体会の実施

各部、教科会での取組の報告や出張報告会等を実施した。

##### イ 各部単位での研究授業の実施(一人一授業研究)

全教員が細案を書いて研究授業を行い、部内で参観、授業研究会をもった。研究授業と同様、参観者に『授業参観シート』(表2)と『授業評価の観点』(表3)を配布し、授業の評価を行った。

ウ 教科会の実施

部を超えた縦割りの教員構成によって、教科指導における系統性の確立を目指し、各教科、重複障害、保育の教科会を設けた。各教科等の教材教具の工夫、発問の工夫、板書計画、評価方法等について検討を行った。

エ 教員の評価

すべての教員に『授業の評価（自己評価）』（表4）を配布し、各学期末に自分の授業について自己評価を実施した。

表 2 授業参観シート

( 部) 氏名 ( )	
指導の力点 (支援について)	
<input type="radio"/> ◇◇◇◇～ (発問や板書についてや視覚的な支援の工夫についてなど)	
<input type="radio"/> ◇◇◇◇～	
参考にしたいところ	
意見	他に考えられる指導の手だて
その他	

表3 授業評価の観点

事項	評価の観点	評価	気付き
聴覚活用等	補聴器を装着しての聞こえの状況を確認している。	4・3・2・1	
	暗騒音や教員の声の大きさ等に配慮している。	4・3・2・1	
	視線の集中、発言の際のルールなど聴覚障害に配慮した授業規律を習慣づけている。	4・3・2・1	
	読話しやすい話し方をしている。	4・3・2・1	
指導目標	本時の学習目標は適切である。	4・3・2・1	
	本時の学習目標に到達できた。	4・3・2・1	
発問・授業構成	本時の学習の前提となる言葉や知識の理解の状況の評価するための発問を行っている。	4・3・2・1	
	授業の内容理解の状況の評価するための発問（手だて）を行っている。	4・3・2・1	
	自ら思考できるような発問を行っている。	4・3・2・1	
	教員の発問や説明を、幼児児童生徒が正しく理解できている。	4・3・2・1	
	幼児児童生徒の発言の意味や意図を教員が正しく汲み取れている。	4・3・2・1	
	聞く・見る・書く・話す・考えるの活動がバランスよく配分されている。	4・3・2・1	
言語指導	幼児児童生徒の発達や障害の状況、授業場面に応じたコミュニケーション手段を選択している。	4・3・2・1	
	音韻を押さえ、言葉や文の意味が正しく理解できているか評価できるような読みをさせている。	4・3・2・1	
	授業を進めていく上で必要な授業用語の定着を図るための手だてを行っている。	4・3・2・1	
	文法の誤りについて改善を図るための手だてを行っている。	4・3・2・1	
視覚的工夫	授業の流れが見て分かるように、板書を整理している。	4・3・2・1	
	板書をノートに視写する時間を確保し、その状況の評価している。	4・3・2・1	
	実物・図・ビデオ等視覚的な補助教材や視聴覚機器を準備し、活用している。	4・3・2・1	

評価について

4・・・大変よくできている 3・・・よくできている 2・・・あまりできていない 1・・・できていない

表4 授業の評価（自己評価）

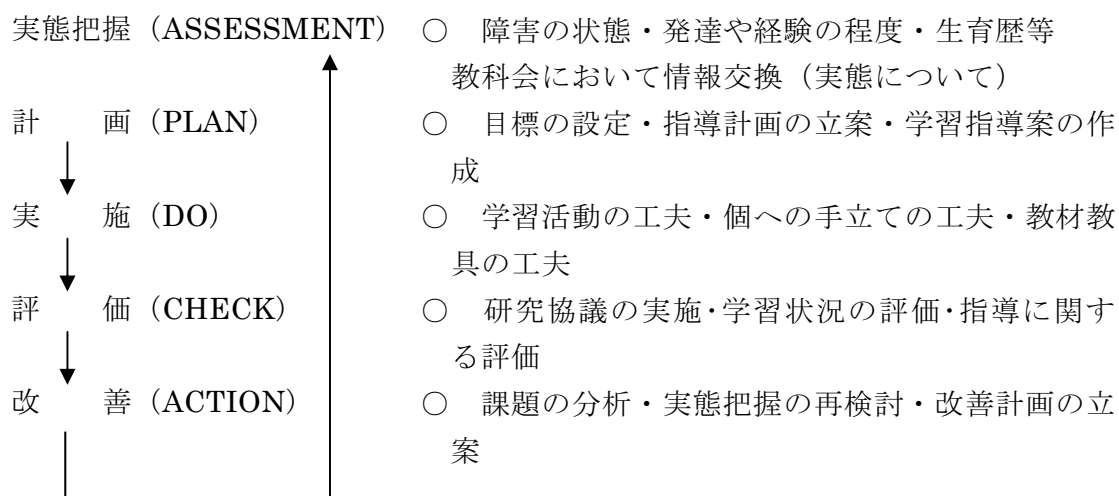
事項	評価の観点	評価
聴覚活用等	補聴器を装着しての聞こえの状況を確認している。	4・3・2・1
	教室の音環境や声の大きさ等に配慮している。	4・3・2・1
	視線の集中、発言の際のルールなど聴覚障害に配慮した授業規律を習慣づけている。	4・3・2・1
	読話しやすい話し方をしている。	4・3・2・1
指導目標	学習目標を適切に設定している。	4・3・2・1
	学習目標に到達できている。	4・3・2・1
発問・授業構成	学習の前提となる言葉や知識の理解の状況の評価するための発問を行っている。	4・3・2・1
	授業の内容理解の状況の評価するための発問（手だて）を行っている。	4・3・2・1
	自ら思考できるような発問を行っている。	4・3・2・1
	教員の発問や説明を、幼児児童生徒が正しく理解できている。	4・3・2・1
	幼児児童生徒の発言の意味や意図を教員が正しく汲み取れている。	4・3・2・1
	聞く・見る・書く・話す・考えるの活動がバランスよく配分できている。	4・3・2・1
言語指導	幼児児童生徒の発達や障害の状況、授業場面に応じたコミュニケーション手段を選択している。	4・3・2・1
	音韻を押さえ、言葉や文の意味が正しく理解できているか評価できるような読みをさせている。	4・3・2・1
	授業を進めていく上で必要な授業用語の定着を図るための手だてを行っている。	4・3・2・1
	文法の誤りについて改善を図るための手だてを行っている。	4・3・2・1
視覚的工夫	授業の流れが見て分かるように、板書を整理している。	4・3・2・1
	板書をノートに視写する時間を確保し、その状況进行评估している。	4・3・2・1
	実物・図・ビデオ等視覚的な補助教材や視聴覚機器を準備し、活用している。	4・3・2・1

自由記述（1学期の反省、気づき、改善したい点等）

--

## (2) 各部での取組

各部の幼児児童生徒の実態や実情に応じて研究を進め、P D C Aサイクルに基づき、各部で研究に取り組む。



## 4 研究の実践

### (1) 学校全体での取組

#### ア 全体研修

##### (ア) 全校授業研究会

各部の代表者による研究授業を行い、全体での授業研究会を実施した。他学部  
の授業を見ることで教科の専門性に触れたり、種々に工夫された教材を見たり  
することができた。また、授業参観シートに記入することで、授業における支援の  
工夫を考える機会となった。教員からは、「自分の授業だけでなくいろいろな教科  
の授業を通して、向上・改善させなければならないことをよく考える機会に恵ま  
れよかった。」「今後も研究授業を生かして多くの意見をいただきながら、指導の  
向上に努めたい。」などの意見が聞かれた。

##### (イ) フリー授業参観

それぞれの教員が2つ以上の授業参観を行うことで、聴覚障害のある子どもに  
対する授業の様子や配慮の仕方について理解することができた。今年度、本校に  
転任してきた教員で初めて聴覚障害のある子どもを担当する教員についても、授  
業のイメージが持ちやすかった。また、授業参観シートを利用し、参考にしたい  
ところを書くことで、支援の工夫につながった。参考にしたいところは、それぞ  
れの授業や教科ごとにまとめ、自身の授業の参考となる資料とした。

##### (ウ) 第一回公開授業研究会

各学級の授業参観や実践報告を通して、講師の藤本裕人先生に指導助言をいた  
だいた。聴覚障害のある幼児児童生徒の実態把握の方法や支援の工夫について以  
下のような指導助言をいただき、改善に取り組んだ。

##### ○音環境の整備について

教員は、75～80 dB の音声情報が出せているかどうか、子どもは補聴器に  
どの程度の音が入れば明瞭に聞きやすいのかについて、子どもが的確に拾いやす

い音圧を子どもが座っている場所で確認することが必要である。また、CDやDVD等の音量についても騒音計で予め計測をしておき、音のボリュームを決めておくとうい。

#### ○板書について

板書の順番をたどれば授業が思い出せ、8割程度授業で教員が何を言ったか思い出せるような板書であること。思考の整理ができるような板書の工夫が必要である。

#### ○動線について

授業中に子どもが黒板まで動きやすいような動線の工夫が必要である。プレゼンテーションの機器などがあるので、LANケーブルやコンセントを固定するとよい。スクリーンを使う場合には、黒板が使えなくなっている部分があることから、スクリーンと黒板など、子どもの視線の集め方を考える必要がある。

#### ○少人数化への対応について

TTの授業では、サブの教員の役割が重要である。子どもが複数いる場合には、サブの教員が子どもに合わせた説明や教え方をしたり、子ども役として授業に参加したりすることも必要である。また、子どもが少ないと、他の人の意見を聞いてイメージを膨らませることが難しいため、先輩の作文や作品を教材として活用することも重要である。

### (エ) 第二回公開授業研究会

焦点授業として、中学部3年生の英語の授業を実施し、これまでの実践報告を行って、講師の藤本裕人先生から指導助言をいただいた。藤本先生が挙げられた聾学校の今日の課題は、子どもの実態を把握して対応することであった。内容は教科指導を行うにあたり、聞こえにくい子どもにどうやって教えるか、コミュニケーション手段をどうするか、少人数化への対応、重複化への対応等、具体的な指導方法であった。また、授業研究を行う意義については、様々な立場から「自分ならこうする」という意見を出すことで深まりが出て新たな視点から指導法が見つかることや授業を見合うことで、それぞれの専門の教員が意見を共有しあうことができるという助言をいただいた。

### イ 教科会

今年度初めて、教員が部の枠を離れ、縦割りの構成を取る教科会を実施した。それによって教科によっては、授業の前に担当者で話し合ったり、適宜、ケース会議を開いたり、系統性を持たせた指導等について話し合いが深まった。教員からも「教科会で内容の精選ができ、目標達成のための課題（内容・単元）を児童に合わせて設定することができた。」という意見があった。一方で、人数が少ない教科では、話し合いが深まらなかったところもあり、指導の系統性や教材の共有化を図っていくために、今後、教科会の持ち方に工夫が必要である。



## (2) 幼稚部の取組

### ア 実態把握

幼稚部では、標準化された検査等と日常の行動観察によって幼児の実態の把握を行った。そして、学期ごとや行事等の授業の前に実態の確認をし、教員間で共通理解を図るようにした。実施した検査と実施時期、行動観察の項目については、以下のとおりである。

実施した検査と実施時期

標準化された検査等	実施時期	
	4歳児	5歳児
絵画語い発達検査	H22. 5	H22. 2、H22. 5
遠城寺式乳幼児分析的発達検査	H22. 5	H22. 1
WISC-III	未実施	H22. 6
聴力測定	学期ごと、必要に応じて実施	
語音明瞭度検査	未実施	H22. 3
発音検査	H22. 12	H22. 4、H23. 1
ことばの記録(幼稚部で作成したもの)	学期ごとにチェック	

### 行動観察の項目

<ul style="list-style-type: none"><li>・聞こえの状態の確認</li><li>・コミュニケーションモードの確認 (子どもが使用するモード、子どもが理解できるモード等)</li><li>・発音発語の状態</li><li>・文字に対する興味、文字を読む力、書く力について</li><li>・幼児の興味、関心について</li><li>・記憶できる情報量について</li></ul>	など
---	----

### イ 計画

- (ア) 合同保育における幼児の実態に応じた支援の在り方について検討する。
- (イ) 研究授業については、年間に細案の授業を1人1回、略案の授業を2回実施する。細案の授業については、授業の中で扱う言葉の語彙表を作成し、おさえる言葉などを事前に話し合い、教員間で共通理解を図る。
- (ウ) 教材・教具の共有ができる工夫をし、授業で生かせるようにする。

### ウ 実施

#### (ア) 合同保育について





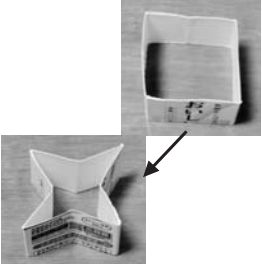

幼稚部は平成19年度から2年間在籍者がなく、昨年度も4歳児1名であったので、合同保育の形を確立するところから始めた。チーフの教員1名とサブの教員2名がそれぞれ幼児に付き、個々に対する支援を行ったり、言葉のおさえなどを行ったりした。2名とも聴覚を活用した音声言語でのコミュニケーションが中心

であるので、必要に応じて口声模倣を促し、曖昧なところを文字や指文字で確認した。また、二人とも手話を使った方が意味が分かりやすいため、手話も活用して意味が理解できているか確認した。

教材・教具の工夫としては、手順や活動の流れが分かる絵カードや文字カードを提示し、活動への見通しをもたせるようにした。また、具体物や模擬物を提示・活用し、幼児のイメージを広げたり、考えるヒントとなったりするようにした。

幼児の実態が違うのでクラスごとに事前事後指導を行い、言葉や理解の確認をし、活動内容を深められるようにした。また、教員同士で個々の幼児についての支援事項を話し合う中で、聴覚障害児への配慮事項などを必要に応じて確認し、教員一人一人の専門性の向上に取り組んだ。

製作遊びで使った写真カード

 <p>ほっちきす ホツチキスで とめる</p>	 <p>あなを あける</p>	 <p>すいしゃの つくりかた</p>
 <p>はねに すとりー ストローと たけひこを とおす</p>	 <p>ぱっく パックを おる</p>	 <p>ぱっく パックを きる</p>

(イ) 研究授業について

細案の授業では、授業で扱う言葉を挙げ、語彙表にまとめた。そして、授業の前に幼児が理解している言葉、表出している言葉を確認し、授業を行う教員でおさえたい言葉を確認した後研究授業を行った。

本年度に実施した研究授業

時期	単元	時期	単元
6月	「おともだちになってね」のげきあそびをしよう (全校授業研究会)	7月	カレーライスをつくろう
		9月	パラシュートであそぼう
6月	むぎをそだてよう	12月	クリスマスリースをつくろう

語彙表の例 「おともだちになってね」のげきあそびをしよう

絵本の言葉	A児		B児	
	授業前	おさえ	授業前	おさえ
おともだち	◎		◎	
もり		○		○
いえ	◎		○	○
くま	◎	○	◎	
ひとりぼっち				○
さびしい		○		○
ためいき				○
つりばし		○		○
わたる		○	◎	
ケーキ	◎		◎	
おたんじょうび	◎		◎	
はんぶん	◎		◎	
きる	○	○	◎	
ゆうき				○
むこう		○	○	○
きつね	◎		◎	
はずかしい	○	○	○	○
おおよろこび			○	
おいしい	◎		◎	
もったいない				○
ノック		○	○	○
ふた	◎		◎	
うさぎ	◎		◎	
りす	○	○	◎	
はじめて		○	○	○
おれい	○	○	○	○
きのみ		○	○	○
かかえる				○
ごちそうさま	◎		◎	
にんじん	◎		◎	
おれかける	◎		○	
もらった	◎		◎	
たまねぎ	◎		◎	
ろうそく	○	○	○	○
ねむってる	○	○	○	
すてき			○	
おもいつく				
(お)りょうり	○	○	◎	
いためる			○	○
(お)なべ	○	○	○	○
いれる	○	○	◎	
カレーこ	○	○	○	○
におい	○	○	◎	
めをさます	○	○	○	
いわう		○		

活動中の言葉	A児		B児	
	授業前	おさえ	授業前	おさえ
げきあそび		○	○	○
えほん	◎		◎	
じゅんぴ	◎		◎	
つくる	◎		◎	
おめん		○		○
がようし	○	○	○	
おりがみ	○	○	○	
しんぶんし	○	○	○	○
こうこく				○
おはなかみ				
あつかみ				
〇いろのかみ	○	○	○	○
かみテープ				
わた				
モール				
セロテープ	◎	○	○	○
りょうめんテープ				○
ガムテープ				
ビニールテープ				
タフロンテープ				
ホッチキス	○		○	
マジック	○	○	◎	
バンド	○	○	○	
つける	○	○	◎	
まるめる	○	○	○	○
つつむ			○	○
はる	◎		◎	
かく	◎		◎	
まく		○	○	○
きる	◎		◎	
かして	◎		◎	
とって	◎		◎	
かわって	◎		◎	
はっぴょうする	○	○	○	○
ちやいろ	○	○	◎	
オレンジ	○	○	◎	
だいだいいろ	○	○	○	○

(ウ) 教材・教具の共有化について

これまでに作成された絵カードやプリント類のデータを教材サーバーにフォルダを作って整理して保存し、使用できるようにした。

行事等で作成した教材・教具については、毎年使えるように整理をし、保管するようにした。

教材サーバー内の行事関係フォルダ

1月 正月お楽しみ会	9月 ぶどう狩り
2月 節分	9月 敬老の日
3月 お別れ遠足	10月 学習発表会
3月 ひなまつり	10月 体験学習
4月 春の遠足	12月 クリスマス会
5月 こいのぼり	プール学習
5月 母の日	マラソン大会
6月 うわろうピック	わたしたちの作品展
6月 ふれあい体験学習	交通安全教室
6月 父の日	避難訓練
7月 海浜学習	幼児体験第1回
7月七夕会	幼児体験第2回

エ 評価

- ・研究授業では、本校の「授業評価の観点」を使って授業の評価を行った。
- ・語彙表を作成した授業については、個々の幼児の言葉の定着を確認し、今後の指導でおさえる点などを確認した。
- ・学期末に授業について自己評価を行った。『評価の観点の視点』の項目を確認しながら、授業のポイントなどを教員間で話し合った。

オ 改善

(ア) 実態把握から

1学期に実施した検査について考察したり、日常の行動観察についての情報交換をしたりしたうえで、2学期の個々の幼児の配慮事項を確認し、教員の共通理解を図った。

絵画語い検査では、両児とも身の回りの物の名前については理解できているが、動詞や上位概念の言葉については、理解が難しい傾向が見られた。4歳児は自分から言葉を表出することが苦手であるが、身の回りでよく使われる言葉は聞いて知っているようであった。5歳児は日常の行動観察から、動詞を擬語や身振りで表現することが多く、文の形で表現することが難しい様子が見られた。そこで、言葉掛けの中で動詞や上位概念の言葉を増やし、言葉の質を高めるとともに、文で表現するように働き掛けることにした。

5歳児に実施したWISC-IIIの結果の考察を行った。それによって日常の行動観察と照らし合わせて考えることで得意なことと苦手なことがはっきりと分かり、課題が明確になった。言葉を使って説明することが難しいので、質問に的確に答えたり、文や言葉できちんと表現したりするように支援することが必要であると確認した。また、確信が持てなくても答える姿勢に弱さが見られたので、本人にとって分かりやすい視覚的な工夫や、モデル等を示しながら、自信をもって取り組める課題や言葉掛けが必要なことも確認した。

(イ) 合同保育の幼児の様子から

幼児は合同保育等、共に活動することで、子ども同士のかかわりが増えてきた。しかし、友達の発言を聞いていなかったり、子ども同士で話し合うことが難しかったりする様子が見られた。そこで、子ども同士の顔や発言が見えやすいように

座らせ、相手が発言しているときには注目するよう促し、発言の内容を確認するようにした。

(ウ) 語彙表を使った取組から

語彙表については、使用する言葉を挙げ、おさえる言葉を教員間で確認できることや、いろいろな言葉を意識して言葉掛けができることなど、よい点があった。そこで、研究授業だけでなく、保護者が参加する行事についても語彙表を作成した。保護者にもおさえる言葉を知ってもらうことで、学校だけでなく家庭でも行事に関する言葉を使ったり、聞いたりする機会を増やし、様々な言葉に触れ、語彙の拡充を図りたいと考えている。また、語彙表を基に絵カード等を作成した。

(エ) 公開授業研究会から

6月と11月に行われた公開授業研究会において、藤本先生から様々な助言をいただいた。

第一に、サブの教員の役割についてである。子どもが少なくなっているので、サブの教員が重要な役割を果たさなければならない。チーフの教員が言った言葉をそのまま同じに繰り返すのではなく、5歳児であれば子どもに使わせたい言葉を付け加えて言葉掛けをする。4歳児は音声言語を数多く使わせるために、繰り返して言って数多く言わせるように促すなどの助言を受け、子どもの実態に合わせた言葉掛けをすることの大切さを確認した。また、子どもの役になって発言したり、揺さぶりを掛けたりすることが必要であるとの指摘もあった。語彙表を作成し、おさえる言葉を確認することで、言葉を覚えているか確認したり、模倣するよう促したりするようになってきたが、拡充模倣を促したり、活動を広げるようなかわりや言葉掛けについてはまだまだであり、今後も話し合いながら進めたい。

第二に、言葉の積み上げについてである。言語概念を上げていくには下位概念から上位概念に上げていくことが大切である。語彙表の言葉には、下位概念から上位概念まで様々な言葉が入っているので、概念ごとに整理し、下位概念から上位概念へと言葉を積み上げていくことができるように作っていくと、よいものになっていくとの助言を受けた。保育で取り上げる言葉について、今後も検討を重ねていきたい。

第三に、言葉をおさえるための具体的な方法についてである。模倣までもっていくためには、幼児期から何度も聞かせたり手話で見せたりすることが必要である。そして、子どもの頭の中で動いている思考を教員が言葉にして発声したり、手話で表現したりすることが必要であり、授業の流れが止まることになっても、模倣をするタイミングをおさえていくことが大切であるという助言を受けた。模倣をするタイミングは難しいことがあり、活動に流されてタイミングを失ったり、大きく流れを止めて活動への意欲が失われてしまったりしないように、チーフとサブの教員が言葉を掛けながらタイミングを図っていききたい。

## ぶどう狩りについて

### 1 目標

- ・お母さんや友達と一緒に話をしながら、ぶどう狩りをする。
- ・約束を覚えて、守ろうと気を付ける。

### 2 行事に関する言葉

※ 特におさえない言葉は、○印をつけています。場面の中で意識して言葉掛けをしたり、言わせたりして、正しく使えるようにしましょう。

#### 名詞

ぶどう	○たね	○かわ	はさみ	は (はっぱ)
○つる	たな	ふくろ	○ふさ	○しる
ねもと	さき	(ぶどうの種類)	(虫の名前)	

#### 動詞

とる	きる	たべる	○だす	ふむ
もつ	○ひっぱる	のぼす	○つぶす つぶれる	おとす おちる
○きずつける	○まもる			

#### 形容詞

○あまい	おいしい	○すっぱい	しぶい	たかい
ひくい	おおきい	ちいさい		

#### その他

おいしそう	○やさしく	ちょきん	ぺえっ	○ぶちゅ
○～してから	(ぶどうの様子)	(気持ちの言葉)		

文例 文の形で話をするようにしましょう。

- ・ぶどうの ふさを もって つるを きるよ。
- ・ぶどうを つよく もつと つぶれるよ。
- ・たべてから つぎのぶどうを とるよ。

### 3 気を付けたいこと、お願いしたいこと

- ・したこと、思ったことなどをメモ帳に書いて、話をしながらぶどう狩りをしましょう。書くことで、次へ次へと目移りしないで、じっくり話ができると思います。そして、メモしたことを絵日記をかくときに活用しましょう。
- ・注意をするよりも約束を思い出させるようにして、本人が気づいて約束を守るような言葉掛けをしてみましょう。守れているときには、必ずほめましょう。

## カ 成果と課題

### (ア) 実態把握について

検査や日常の行動観察を通して、幼児の聞こえや言葉だけでなく全体的な発達について実態把握を行った。これにより、様々な面から実態を把握し、教員間で共通理解を図ることができ、実態や課題、支援の方法について話し合う機会が増えた。標準化された検査等を実施したが、前回までの結果と比較して考察することができなかった。子どもの発達の様子を継続して見られるように、検査の特徴を踏まえたうえで、実施する時期、検査等を見直し、負担が少なく継続的に実施できるようにしていくことが必要である。

### (イ) 教員の支援について

幼児同士のかかわりについては、相手が発言するときに注目するよう促すなどしたことで、少しずつ相手の発言に興味をもったり、相手に自分の考えを伝えたりする姿が見られるようになってきた。今後も幼児同士のかかわりを深めるような支援が必要である。少人数化により、集団の中で学び合うことが難しく、活動に広がりをもたせられないところがある。活動に広がりをもたせるためには、サブの教員の役割が大切であり、子ども役になって活動を盛り上げたり、子どもの言った言葉を拡充して模倣を促したり、子どもが思っていることを言語化したりするなど、場面や子どもの様子に合わせる必要がある。個々の教員の言葉掛けの質を高めるとともに、教員同士で役割分担をしながらより効果的なかかわり方を考えていくことが必要である。合同保育では教員と一緒に活動に参加しているため、教員のかかわり方について客観的にとらえることが難しい。今後、研究授業を録画してビデオ分析を行うなど検討の仕方を工夫し、より効果的な教員のかかわり方について考えていく必要がある。

### (ウ) 語彙表について

語彙表を作成することで、授業で扱う言葉やおさえる言葉について確認ができ、言葉掛けの工夫ができるようになってきた。また、本年度は研究授業や保護者が参加する行事などの語彙表を作成してきたことで、製作、調理、栽培に関する語彙がまとまってきた。今後、行事や合同保育、学校生活に関する言葉の語彙表を作成し、本校幼稚部の活動に関する語彙表を作成できるようにしたい。そして、語彙表の言葉をさらに検討し、下位概念から上位概念へと言葉を積み上げていくことができるようにしていきたい。また、語彙表を基にして絵カードや宿題プリントを作成するなど、教材・教具の作成にも活用していきたい。

### (エ) 教材・教具について

教材サーバーに絵カードやプリントなどのデータを整理して保存し、活用できるようにしたり、作成した教材・教具を整理し保管したりすることで、これまである教材・教具を生かして授業の準備をすることができるようになった。今後も教材・教具の共有化を図り、効率的に準備をしたり、よりよいものを作成していくことで、初めて幼稚部を担当する教員にも、行事等でどのような教材・教具が必要であるか参考になったりするのではないかと思われる。在籍児のいない年度もあると思われるので、これまで積み上げてきたものを引き継いでいきたい。

### (3) 小学部の取組

#### ア 実態把握

小学部では、標準化された検査等（読書力診断検査、CRT標準学力検査、指定学年での知能検査、聴力検査）と過去の教育実践、行動観察等をふまえて、部内で自立活動研究会を開き、児童一人一人について聴覚的な特徴や発音面、言語面、学習面での課題、コミュニケーションの様子について情報交換を行い、実態把握に努めている。また、少人数指導の利点を生かし、実態に応じて個別の授業が行える体制を整え、指導に取り組んでいる。しかし、教科指導における学習のつまずき等の課題が引き続き見られる児童もあり、更に詳細な実態把握のために授業における支援の様子や検査等の実施について話し合う機会の必要性が出てきた。

#### イ 計画

授業場面での支援の様子について情報交換の機会を設けるため、教員全員が研究授業を年間3回以上実施することにした。そして、そのうち1回の授業については、授業研究会を開くことにし、必要に応じて他学部の教員にも参加を依頼することにした。また、学習のつまずきなどの要因を客観的に把握するため、全児童に絵画語い発達検査を実施することにした。そして、更に詳細な実態把握、教員の専門性向上のため必要に応じて自立活動や諸検査等の研修を行うこととした。

小学部年間研究授業一覧

回	月 日	クラス	内 容
1	5 / 1 8	3年梅組 (重複学級)	生活単元学習 「交流を振り返る」
2	5 / 2 6	全クラス	フリー授業参観についての情報交換
3	7 / 6	5年梅組 (重複学級)	国語 「昔話ーさるかに」
4、5	9 / 1	5年松組	社会「これからの食料生産とわたしたち」
6	9 / 7	4年松組	国語 「一つの花」 全校授業研究会として実施。
7	9 / 1 4	5年松組	算数 「面積の求め方を考えよう」
8	1 0 / 7	3年松組	国語 「ちいちゃんのかげおくり」
9	1 1 / 3 0	5年松組	音楽 「茶色の小びん」
1 0	1 2 / 7	5年松組 5年梅組	外国語活動 「外来語を知ろう」



## ウ 実施

### (ア) 研究授業

指導案に授業参観シートと評価表を添付し実施した。授業参観シートに支援のポイントを明確に示し、授業研究会では討議の中心に据えて話し合った。

#### ○第6回研究授業（全校授業研究会 4年国語）

##### 協議の内容

###### <TTの授業について>

- ・サブの教員がゲストティーチャーとして、具体物を提示し戦争の雰囲気を伝えることができていた。
- ・役割分担がなされており、効果的であった。

###### <文章の読ませ方、気持ちの押さえ方について>

- ・分からないところを、説明してから読ませる。
- ・一通り説明してからもう一度読み直す。
- ・黒板に絵を描いて、生徒の読み取りの助けとする。
- ・場面を区切って、情景を押さえる。発問を絞り、それに対してしっかり考えられるようにする。
- ・感情のとらえ方の難しい児童には、簡単な表現にし、近いものを選ばせる。
- ・全体を伝えてから授業を行う。色分けしながら、登場人物の誰の気持ちか分かるようにする。やり取りをしながら自分ならどう思うかということから考えさせる。意見の出ないときには、教員の経験の中で似たようなことを話す。
- ・実際に文章に書いてあることをやってみるなどして、気持ちを考えさせる。
- ・子どもの発言をとらえてそれを返していくことで、イメージを共有する。

#### ○第1回研究授業（3年生活単元学習）

##### 協議の内容

###### <児童の発語に対する応答>

- ・児童の気持ち、発語に対して丁寧に受け止め、やり取りするのは大切である。
- ・児童の発語の状態からは、「滑り台」を「すーだい」のように伸ばす音を入れると言いやすい。
- ・擬態語、擬音語で言っていた発語をおさえてから、言葉を入れるとよい。
- ・将来に向けて、児童がはっきり言える言葉をプロフィールなどにしておくとよいのではないか。

#### ○第7回研究授業（5年算数）

##### 協議の内容

###### <子どもの思考活動をどこまで待つか>

- ・小学部段階では、「公式」を導き出す過程を重視している。中学部・高等部の立場からすると教科書通り過程を重視した方がよいのか。それとも、理論はある程度で公式が使えるようにしておいたらよいのか。理屈が通じない子は方法を教える。通じる子は理論をどんどん教える。しかし、「公式」には意味があるので、式が語ることをどの子どもにも読み取ってほしい。
- ・子どもが詰まる場面が想定できていれば、事前に対策を立てることができる。

- ・考えを待つときは、時間で区切れば中立である。
- ・二者択一の発問やこちらから提示していくことも教科指導を進める上では必要である。
- ・思考が止まってしまったときは、立ち止まるのも一つの方法である。

<子どもの視点の戻し方、教員を見る姿勢について>

- ・指示されたことが終わったら、ひざに手を置いて待つなどの習慣付けが必要である。
- ・つまずきの傾向等ポイントをピックアップして、他学部にも情報を共有できるようにしてほしい。

#### ○第8回研究授業（3年国語）

協議の内容

<読解を深めるための教材の工夫について>

- ・言葉の確認テストのやり方、読み方の指導、読解の前に前提となる知識不足は、教科書に線を引きながら読み進めていくうちに気付くことがある。

<ねらいにせまる思考をさせるための活動と発問の工夫について>

- ・質問を決めて、そのための発問を考えている。ねらいに使う言葉をキーワードとしている。二者択一ではなく、自分が選んだ言葉の理由付けをしっかりと聞くようにしている。

#### ○第10回研究授業（5年外国語活動）

協議の内容

<コミュニケーションの素地を育てる>

- ・相手に発信するときの方法の選択、受信できなかった時の発信依頼ができるように場面設定して行っている。
- ・和製英語から指導を始め、初めからカードで見せずに、伝わらなかった時に、次はどうするかを考えることも大事である。

<発音表記について>

- ・発音は平仮名表記、アクセントは赤で書いているが、中学部・高等部と引き継げるように、英語科でデータベースを作っていく。
- ・辞書を統一し、その表記に準じるには、発音記号と一致するかの問題がある。
- ・辞書を全学年で統一し、受験を目指す生徒には、別の辞書を検討してもらおうとよい。英語科会で検討してもらおう。

(イ) 絵画語い検査の実施

(ウ) 諸検査等の研修

エ 評価

(ア) 研究授業を通して

研究授業を定期的に行うことで、授業研究会の機会だけでなく日常的に児童の情報交換が教員間で行われるようになった。また、TTの授業については、サブの教員の授業へのかかわり方について情報交換ができた（ゲストティーチャータ的な授業への入り方、思考や理解の支援のための入り方、子ども役としての入り方など）。何より教員間で互いの授業を見合う機会が少ないので、自分の授業を振り

返る良い機会となり、それぞれの教員が参考になった支援をもとに新たな工夫につなげようとする姿勢につながってきた。そして、普段の授業場面で継続して活用したり研究したりしている支援の工夫について、校内の共有ドライブを活用してデータとして保存し、定期的に情報交換を行うことになった。

(イ) 支援の明確化により

授業参観シートに支援のポイントを示すことで、授業者の授業に対する考えや支援の方向性がはっきり分かり、意見交換が効果的に行えた。また、授業研究会を重ねることで、支援に対してだけでなく、教員の指導観にまで踏み込んだ意見交換が行えるようになった。

(ウ) 普段の支援の変化により（児童の変化）

授業中、発音や言語面での指導を意識してできるようになってきた。そのことで、児童も相手に伝わるように手話等のコミュニケーションモードを丁寧に使ったり、相手をきちんと見て理解しようとしたりする姿勢が身に付いてきた。

普段から文節のまとまりを意識して板書を写すように促していると、文を暗記して書き写すようになってきた。また、指示されなくても、必要に応じて自主的に板書が写せるようになってきた。

(エ) 絵画語い発達検査の実施

これまで小学部では読書力診断検査の中で語彙力を測ってきた。絵画語い発達検査の結果は、それと大きく異なるものではなかったが、言語力の基本となる語彙力をより多様な課題で測ることで、言語面の詳細な実態把握を行うことができた。

(オ) その他の検査の実施

各種検査等の研修をすることで、検査の手順だけでなく目的や可能性について学ぶことができた。それによって、児童のつまずきなどに対してどのような検査が合っているのか意見交換することができ、より詳細な実態把握を行う必要のある児童については、実際に発達検査等を実施することにした。

オ 改善

(ア) 教材の工夫

○ 3年国語

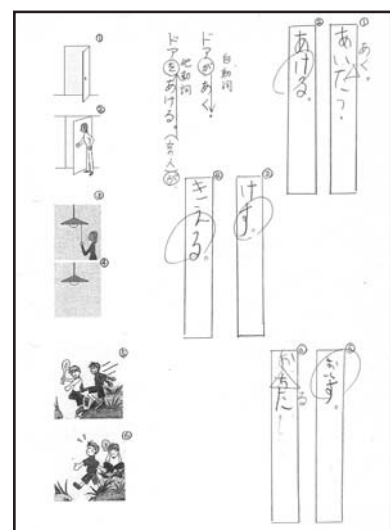
自動詞・他動詞の指導の例（図①）

【児童の実態と支援の工夫】

普段使い慣れていない動詞では、自動詞と他動詞を間違えて使用する児童に指導した例。「集める」と「集まる」など、自動詞、他動詞の指導を行った。使い分けができるよう、イラストで示すとともに、イラストや文の中で、対象物に対して働き掛ける方向を示す記号をつけて理解させた。

【児童の変容】

自動詞、他動詞が判断できるようになり、生活の中で言い直しがしやすくなった。



図①

動詞の活用を練習するプリント（図②）

【児童の実態と工夫】

活用について、国語教育で使用される活用表ではなく、もっと単純化した日本語教育の指導に使用されるような活用表を作成し、指導に生かした。国語辞典の引き方の学習や、「送りがな」の指導で役立った。

【児童の変容】

文章から動詞を抜き出し、国語辞典で調べることができるようになった。語尾に併せて活用させることが容易になった。

活字のこぼしを 読めよう！

めいれい形	じようけん形	させい形	ナイ形	テ形	マス形	辞書形
のぞけ	のぞけは	のぞこ	のぞかなり	のぞいてける	のぞきます	のぞく

図②

○4年算数

垂直・平行の提示資料（図③）

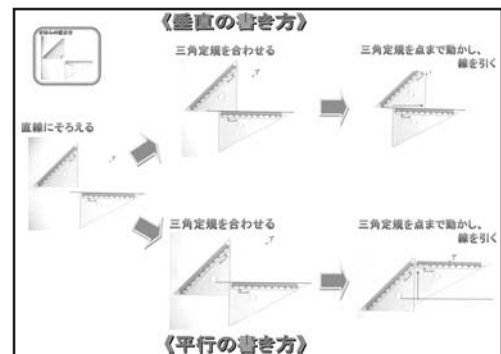
【児童の実態と支援の工夫】

形を正しくとらえることが苦手で三角定規の向きも見本と同じようにそろえることが難しい児童のために、教科書の方法とは異なるが基本の置き方を1つに決めて垂直・平行の書き方を指導した。

パワーポイントを用いて提示した。児童がいつでも振り返られるように補助資料として提示し、児童にもプリントを手渡した。

【児童の変容】

垂直・平行ともに直角をそろえることを意識しながら書くことができた。



図③

○5年外国語活動

【児童の実態と支援の工夫】

聴覚を良く活用する児童、口話中心の児童、指文字中心の児童と、三人三様の理解とコミュニケーション手段をもっているため、お互いが伝え合う工夫が要求される。

毎時間の挨拶を覚えていけるようにワークシート化し、忘れた時のために使用可能にするようファイルした。（図④）

また、日付・天気・体調などを自然に覚えることができるように、ワークシート化したもの（図⑤）を提出させて、教員とのコミュニケーションの積み重ねと理解の深化を図った。

Let's Enjoy English! 英語を楽しもう!

Date(月日): \_\_\_\_\_ Name(名前): \_\_\_\_\_

\*Greetings: (あいさつ)

1. 英語で朝のあいさつは、もう、おぼえたかな?

Good morning! (おはよう!)

2. 「ご機嫌いかがですか? (調子はどう)?」

How are you?

I'm great! 「元気です!」

good. 「いいです!」

not so good... 「あまりよくないです!」

\*Homework Check: 今まで練習したA~YAの復習をしましょう。

1.TOMATO ( ) ( )

2.SUIKA ( ) ( )

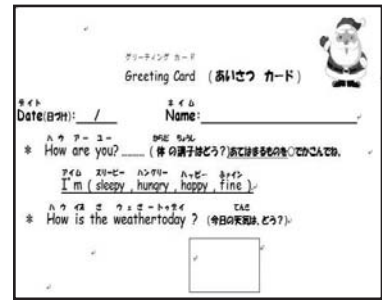
3.TANE ( ) ( )

4.EHIME ( ) ( )

図④

会話で使用するフレーズをカード化し、思い出しながら適切な場面で使用しやすいようにした。絵や写真を使って、状況把握できやすいようにした。

一度に大量の情報を提示すると混乱をきたすため、1つ1つ提示することを心掛けた。また、見通しをもった授業にし、集中することややる気を喚起するため、一時間の流れを提示するようにした。また、自分たちに身近な題材を提供し、親しみやすくした。



図⑤

音をどう伝えるか、アクセントをどう指導するか悩んだ結果、平仮名やカタカナ表記を加え、色を付けたり文字の大きさを変えたりした。

【児童の変容】

初めは、他の児童が言葉をおさえている間に教室を飛び出したり、PCやTVの電源が気になってスイッチを切ったりしていた児童も、流れをつかみ、理解が進むことによって、それが達成感や喜びに変わり、積極的に授業に参加できるようになった。三人三様の理解だが、全体にお互いがコミュニケーションをとる楽しさや状況理解が進むことで、授業に活気が出てきた。よく発表し、間違いを恐れずコミュニケーションをとろうとする態度が見られるようになった。

○梅組文字のけいこの活用

【児童の実態と支援の工夫】

板書を視写することが難しかったので、板書の内容を文字のけいこの形にして、家庭で少しずつ視写する練習として取り組んだ。(4月)

板書の内容に加えて、教材文の内容を文字のけいこの形にして家庭学習として取り組んだ。(5月)

文字のけいこを視写する際に声に出して読みながら書き写している様子を知り、日常生活のルールや行事の事前学習の内容、長期の休み中のくらし、学習発表会の劇のセリフ、音楽の歌詞なども文字のけいこの形にして取り組ませた。

(6月～)

【児童の変容】

文章を暗唱したり、ルールや行事の日程などを覚えたりすることに抵抗があったが、文字のけいこの視写の学習を通して嫌がらず自然に覚えることができ始めた。また、普段の会話の中ではあまり使わないような言い回しや表現、ものの名前などを入れておくことで、少しずつ難しい言葉も理解し始めた。

文字のけいこ(もたろう)①										文字のけいこ(ふゆ休みのくらし)②									
名前( )										名前( )									
10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
おじいさんは、はたをつくりました。	おばあさんは、きびだんごをつくりました。	おにが、わるいことをします。	ごはんを、もりもり、たべました。	ももたろうと、なづけました。	ももから、あかちゃんを、うまれました。	おおきなもちが、ながれてきました。	おばあさんは、かわへ、せんたくに、いきました。	おじいさんは、やまへ、しばかりに、いきました。	むかし、おじいさんと、おばあさんが、いました。	では、よいお年を、おむかえください。	年まつの大そとじを、がんばりましょう。	おもちの、入ったりようりは、おぞうにです。	ふゆのあそびは、たこあげ、こまわし、はこいた。	年がじようは、たくさん、もらえるかな。	お年玉は、たくさん、もらえるかな。	お正月には、おせちりようりを、たべましょう。	一月一日は、がんとんです。あけましておめでとう。	三十二日は、大みそ日、二十年も、おわりです。	二十五日は、クリスマス、キリストのたん生日です。

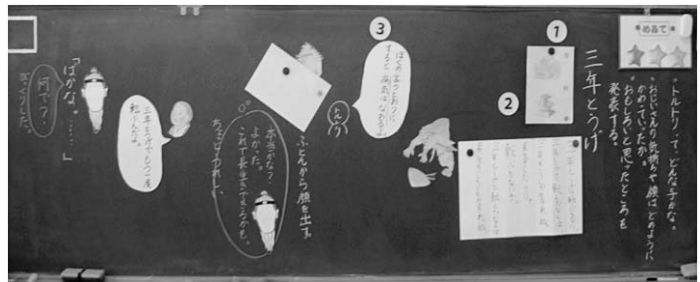
(イ) 板書等の工夫

○ 3年国語（三年とうげ）

【工夫した点】

「めあて」の達成度を絵で表した。

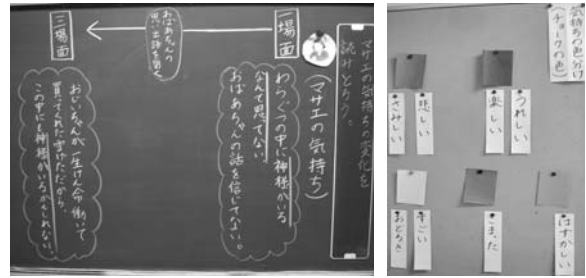
黒板上で教材を操作させ、吹き出しの中を自分で書かせた。



○ 5年国語（わらぐつの中の神様）

【工夫した点】

物語文において、登場人物の気持ちを読み取ることが苦手な児童に対して、気持ちを色で表して板書した。児童は、笑ったから「うれしい」や、泣いたから「悲しい」など簡単な気持ちを考えることはできるが、その理由まで考えることは難しい。また、複雑な表現から気持ちを読み取ることも難しい。そこで、話が進んでいくなかで、人物の気持ちが変わっている様子を、チョークの色を変えて板書し、視覚的に児童に分かりやすいように表現した。



図⑥

また、黒板の横に、「気持ちの色分け」という掲示場所を設け（図⑥）、人物の気持ちを考える際には、色チョークで吹き出しを書くようにした。それぞれの気持ちの色分けについては、児童の意見を尊重して決めたものである。

【良かった点】

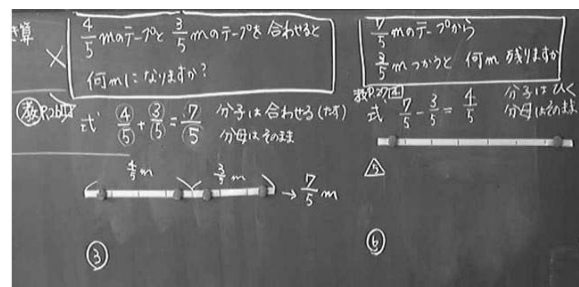
登場人物の気持ちについて、自分の意見を文章で表現することが難しい場合も、色に置き換えて発表できることが増えた。また、その色を選んだ理由をつけて言えることも増えてきた。

○ 5年算数（分数の足し算、引き算）

【工夫した点】

「青チョークはノートに書かない」というルールを作り、文節区切りや書き始めなどの指示は青チョークで書きこむようにした。

ノートに書くときには「前の続き」「新しいページ」という指示を出し、板書とノートができるだけ同じ構成になるようにした。



教科書に準じた具体物（紙テープ）を使用した。

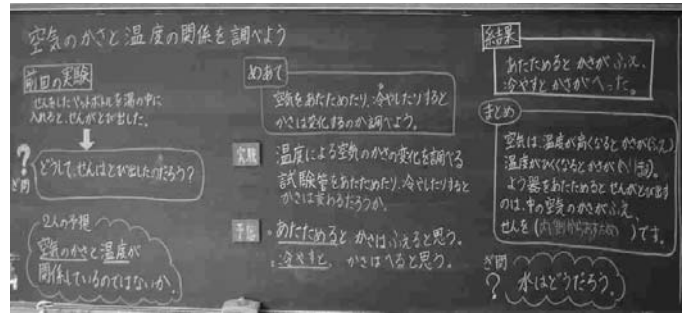
【良かった点】

口頭だけでの指示よりも児童に分かりやすく、指示が通りやすかった。

#### ○4・5年理科

##### 【工夫した点】

児童が、その授業において何を目的に考え、取り組めばよいか、現時点で何が分からなくて何を調べようとしているのかを明確にするために、「めあて」や「疑問」を板書するようにした。



「めあて」については、その授業で達成したい児童の視点での目標、「疑問」については、前時の実験結果や既習事項の現象からの疑問などを取り上げた。また、実験方法、予想、結果、まとめの順で板書を整理していき、児童に授業の流れがわかりやすいように、なるべく同じパターンで授業を進めていくようにした。ワークシートも活用し、書く時間を減らし、児童が活動する時間を増やすように支援した。

##### 【良かった点】

パターンが決まっていることで、児童もスムーズに授業に取り組んでいる様子が見られた。また、はじめに疑問を投げかけることによって、児童が積極的に予想するようになった。その授業でのめあてが、児童の中にも明確になってきたように思う。そして、ワークシートを活用したことで、授業中、児童が活動できる時間が増え、積極的に実験に取り組めるようになった。

#### カ 成果と課題

昨今、デジタル教材や電子黒板などが多く使われるようになってきているが、今回の授業改善プロジェクトで支援の工夫について情報交換する中で、一目で授業の流れを振り返ったり、児童の実態に合わせて柔軟な形で提示したりできる板書の大切さに改めて気付くことができた。そして、板書や教材を工夫することでより子どもたちの姿が見えてくるようになった。また、学習のつまずきやその他、態度等で気になる児童の支援について、学部を越えた話し合いの場（教科会、支援会議）を設定することで、より広い視野で支援の検討をすることができ、中学部・高等部の学部の教員にとっても将来進学してくる児童の様子を知る良い機会となった。

今後の課題として、児童の実態把握について必要な検査を実施することで、客観的な視点をもつことは大切だが、あくまでも教員の支援の方向性や工夫のためのものであることを教員間で相互理解していく必要性が見えてきた。また、他の聾学校では日本語習得のための文法指導において、外国人のための日本語教育法などを積極的に取り入れ、実践しているところがある。言葉の教育のみならず、小学部の人に身に付けておきたい基礎的な学力について他学部の教員とも連携しながら、定着を図るための有効な教材提示の方法について検討していく必要がある。

#### (4) 中学部・高等部の取組

##### ア 実態把握

中学部・高等部には、高校から転勤して来る教員が多く聴覚障害のある生徒に対する授業や接し方、とらえ方について戸惑う者が多い。そのため、生徒の実態を十分にとらえる時間がないまま授業を行っている現状も見受けられる。また、高等部では中学校から入学する生徒に対して実態把握を十分に行えていない現状がある。

そこで、中学部・高等部では一人一人の教員が生徒の実態を正確にとらえ分析し、よりよい授業を行うために基礎的な研修を十分に行い、より聴覚障害についての理解を深めることから始めた。目標は以下のように定め、研修を実施するなかで達成できるよう計画した。

- ・実際の授業の場面における生徒の実態を探る観点を設定し課題を明らかにする。
- ・それを基に、分かる授業を展開するための具体的な方法を実践する。

##### イ 計画

(ア) 生徒の実態把握のための基礎的な研修

(イ) 教材教具の提示の仕方や活用方法の研修

(ウ) 実態把握の実施（標準化された検査の実施等）、実態表の作成（目標、考えられる対応の設定）

(エ) 研究協議の実施（研究授業等を通して行う）

##### ウ 実施状況

(ア) 生徒の実態把握のための基礎的な研修

校内での研修は基礎的な研修を4月初めに行っているものに加え、中・高等部では平成21年12月より月2回程度の研修日を設けている。

主な研修内容を以下に提示する。

#### ○研修1（平成21年12月実施）

目的 聴覚障害のある生徒の特徴を捉える。

研修内容

・「読む」「書く」「聞く」「話す」「定着」の5つの項目を設けそれぞれの項目で、授業中に困ったこと、気付いたこと、疑問に思ったことを記入し検討する。

5つの項目の内容は以下のとおりである。

<読む>

- 1 授業中、生徒は教科書の漢字を読めなかったことがある。
- 2 授業中、生徒は教科書の漢字を間違えたまま読んだことがある。
- 3 授業中、生徒は教科書の漢字を読むことができたが、言葉の意味はまったく分からなかったことがある。
- 4 授業中、生徒は教科書の漢字を読むことができたが、言葉の意味を間違えていたことがある。
- 5 授業中、生徒は教科書を読むことは読んだが、内容の理解はできていなかったことがある。
- 6 授業中、生徒に教科書を読ませたが、正しく読めているのかどうか、実のところよく分からなかったことがある。



#### <書く>

- 1 生徒は、「てにをは」(助詞)を間違えていることがある。
- 2 生徒は、決まったパターンの文章を書くことが多い。
- 3 授業中などに、教員の口頭での説明をノートにまとめる(書きとめる)場面があまり見られない。(補足事項は促さないと書けない)
- 4 生徒は、板書を丸写しすることが多い。
- 5 生徒の書く字は小さく読みづらい。

#### <聞く>

- 1 生徒は、人の話を最後まで聞いていないことがある。
- 2 生徒は、分かっているような顔(うなづくなど)で聞いていたのに、分かっていなかったことがある。
- 3 口形が似ているため、生徒も教員もお互いに聞き間違えをしていることがある。(後で発覚することもある。)
- 4 こちらの手話や口形が曖昧なため、生徒に「もう一度言ってください」と言われたことがある。
- 5 口話で上手に話せる生徒は、自分の話がよく聞こえているのではないかと感じる。

#### <話す>

- 1 授業中、生徒が手話をつけていても、何を話しているかが分からないことがある。
- 2 生徒に対して何回か聞き直しても分からないときに、あきらめてしまうことがある。
- 3 生徒は、場面によって上手に話そうと努力しているときと、そうでもないと思うときがある。
- 4 生徒は質問してから答えるまでの時間が長く、聞こえていないのか、質問の意味が分からないのか、答えが分からないのかつかめないことがある。
- 5 生徒が話すとき(答えなど)、語尾まで話さきれず途中で止まってしまうことがあり、どう対処すればよいかわからないことがある。
- 6 生徒と簡単な話までできるが、深い話は難しいと思うことがある(想像力の不足や、例え話が通じないと感じる)。
- 7 本人に分かるような言葉や内容(簡単な)に変えて話すことがある。

#### <定着>

- 1 生徒は、簡単に覚えた(理解できた)わりに、すぐに忘れてしまっていることがある。
- 2 生徒は、苦勞して覚えたことや体験したことで、忘れていく(「知らない」と言う)ことがある。
- 3 生徒に対して同じ注意を何度もしなければならぬことがある。
- 4 授業やテストなどで、「語呂合わせや節回し、リズムを使った暗記(九九のような暗記)がうまくできればもっと楽に大量に覚えたり、定着したりできるのに」と思うことがある。
- 5 生徒は、その時間の学習内容が他教科や下学年での学習内容と結びつかず、授業中困ったことがある。
- 6 復習に時間をとられ、新しい内容が思うように進まないことがある。
- 7 「この生徒ならこれくらいできる」「同じ問題をやっておいたから大丈夫」と思って出したテスト問題などが、できないことがあった。
- 8 この学習内容はこの生徒には必要ないのではないかと感じることもある。

#### 成 果

- ・授業における、生徒に対する疑問や悩みに対して共通の理解ができ、教員同士が同じ立場で議論できるようになった。
- ・教員は生徒が当然理解できているものと思って授業を進めているが、生徒は理解できていない部分があることが分かり、教員側に常に生徒が理解しているかどうかなどの確認を行う必要性が理解できた。

○研修2（平成22年1月実施）

目的 聴覚障害について学ぶ。

研修内容

- ・聞こえにくさの体験（ノイズ下での聞き取り体験）
- ・オーディオグラムの見方（生徒のオーディオグラムを参考）
- ・生徒一人一人のコミュニケーション手段（オーディオグラムから予測されるコミュニケーション手段）

成果

- ・簡単なゲームを通し、聴覚障害を疑似体験することにより、改めて生徒に対する自分のかかわり方を反省する機会となった。
- ・生徒のコミュニケーションモードを知ることの重要性をあらためて認識する機会となった。

○研修3（平成22年1月実施）

目的 中学部・高等部生徒の受信モード、発信モードについて検討する。

研修内容

- ・一人一人の受信モード（聴覚、手指、読話、その他）発信モード（口話、手指、その他）についてそれぞれの教員が考え下記の用紙に記入し、全員で討議する。

生徒の受信モード発信モードについて自分の意見を書いて下さい							
生徒 氏名	受信モード				発信モード		
	感覚	手指	読話	その他	口話	手指	その他
A	※自由記述						
B							

成果

- ・一人一人の教員が生徒のコミュニケーションモードを考え発表し全員で討議することにより、生徒のコミュニケーションモードにおける共通理解が深まった。
- ・各教科の授業で共通のコミュニケーションモードでの授業が行えることが多くなった。

○研修4（平成22年2月実施）

目的 日常生活における聴覚障害者と健聴者とのトラブルについて知る。

研修内容

- ・絵あるいは四コマ漫画を見て、聴覚障害者の立場でどのような対処をするかそれぞれの教員に発言してもらい討議する。
- ・資料については「聴覚障害教育これまでとこれから」（脇中起余子著）から引用した。



成 果

・ 普段気がつかない何気ないこと [例：「い」と「し」などが聞き分けにくい（17 と 11 の違いなど）、図と口形が同時に見られなく図の説明が分かりにくい] にも、聴覚障害があるが故に困難になっている事があることに気づき、生徒に対する配慮に細やかさがうかがえるようになった。

○研修 5（平成 22 年 5 月実施）

目 的 授業評価の方法について研修する。

研修内容

- ・ 実践事例（授業振り返りシートの活用）の報告をし、内容を検討する。

**授業振り返りシート**

今日の授業を振り返って、『今日の授業のポイント』、『分かったこと、分からなかったこと』を書いてみよう

月 日 ( )	小テスト( )点	自己評価	A	B	C
今日の授業で一番大切 だと思ったこと					
分かったこと、 分からなかったこと					

成 果

・ 授業評価について一つの方法を提示し全員で検討することにより、生徒の理解度の確認の必要性を改めて認識できた。

- ・実践事例を提示することにより、それを基に各教員が理解度の確認をするようになった。

#### ○研修6（平成22年6月実施）

目 的 藤本先生のアドバイスやアンケート結果の検討

研修内容

- ・藤本先生のアドバイスを基に、生徒への対応の仕方、教員の立つ位置、機器の使用  
方法、教室のレイアウトについて検討する。
- ・これまでの研修内容についてのアンケートを検討し今後どのように取り組むか話し  
合う。アンケート内容については下記に提示する。

アンケート内容

○視覚的教材を活用するようになったか？

- ・文章内容を絵で示したり、絵で描かせたりしている。
- ・板書を多く活用するようになった。
- ・写真カード、文字カード、PCやプロジェクター、DVDなどを活用し視覚的に提示するようになった。

○理解できたかどうかの確認を行うようになったか？

- ・学習内容を説明させるようにした。
- ・小テストの実施
- ・発問による確認、授業の最初に提示したテーマに対して、授業の最後にまとめとして再度伝える。プリントの課題を提示させて文字の確認を行う。
- ・必ず復唱させて、その理由等説明を繰り返して行う。
- ・「授業振り返りシート」を活用している。授業のポイント及び自己の理解度を確認させられるようになった。

○その他授業で工夫した点

- ・実物教材の提示
- ・授業での様子を担任に伝えることが多くなった。（情報の共有を図る）
- ・自己表現手段として、英語の歌を歌う活動やアメリカ手話を用いた活動を多く取り入れている。

成 果

- ・各教員の実践や工夫、藤本先生のアドバイス等を聞き、それぞれの教員が授業に創意工夫し、分かる授業を心掛けるようになっている。
- ・藤本先生からのアドバイスを受け、視聴覚機器の精選を行った。授業内容を見直し、（例えば、DVD機器を使用するアメリカ手話の学習に関しては、自立活動の授業で行う）また、教員と生徒との動線が確保できるよう機器の配置について改善を図った。その結果、授業内容が充実し、また教員と生徒両者の動線が確保されたことで授業の流れが止まることがなくなり、生徒の授業に対する注目度や集中力が高められた。

○研修7(平成22年7月実施)

目 的 授業中の声の大きさ(75～80db)について知る。

研修内容

・騒音計を使い、実際の授業場所での声の大きさを測り、適切な声の大きさを知る。

成 果

・適切な声の大きさを数値を見ながら調整することにより、声の大きさの感覚を捉えることができた。



○研修8(平成22年7月実施)

目 的 聴覚障害児に見られる「つまずき」について知る。

研修内容

・「字面が似ていると混同しやすい」「単語の音節が正確に理解できない」「抽象的な言葉が少ない、理解しにくい」など、具体的な例を提示し、どのように授業で工夫すれば対応できるか検討する。

・資料については「聴覚障害教育これまでとこれから」(脇中起余子著)から引用した。

成 果

・授業の中で、どうして理解できにくいのか疑問に思っていた事に気づくことができ、板書、視覚教材等の大切さを再確認することができた。

○研修9(平成22年9月実施)

目 的 「絵画語い検査」「読書力診断検査」の結果から生徒の実態をつかむ。

研修内容

・「絵画語い検査」「読書力診断検査」の内容を知り、検査結果の読み方を学び、各検査から読み取れる一人一人の生徒の実態を把握し、授業の中でどのように反映させるか話し合う。

成 果

・生徒の実態を客観的なデータを基に把握することができ、授業での工夫すべきことや配慮点に気づき、授業に生かせるようになった。

○重複障害生徒に対する研修

・重複障害生徒に対する研修としては、「摂食指導」「歩行指導」「てんかん」等の研修を関係者を中心に実施した。

(イ)教材教具の提示の仕方や活用方法の研修

「基礎的な研修」の中で「教員の立つ位置」「機器の使用方法」「教室のレイアウト」「文字カードや写真の提示」等の研修を行った。その他に、自分の授業の中でうまくいったことを記録し、研修の場面(研究授業を行った後の反省会等)で

話し合いを持つようにした。

(ウ) 実態把握の実施、実態表の作成

これまでの研修で学んだことを基に、一人一人の実態を中学部・高等部全員の教員で確認しながら作成した。また、この実態表には以下の項目を設け、中学部・高等部全教員で協議し決めていった。

- ・各生徒の授業における目標（ここを伸ばしたい。これができれば学習効率が上がる。）
- ・その目標を達成するために「考えられる対応」

これを基にそれぞれの教員が自分の授業で具体的にどのように取り組むかを考え、実践していけるようにした。実態表の作成は2学期になってから行ったが、それまでに各教員は、研修から学んだことを授業の中に取り入れて実践し、研究授業等で成果を発表した。

<実態表の例>

聴力		各種検査			コミュニケーションモード		ここを伸ばしたい (目標) これが出来たら学習効率が上がる	考えられる対応
右	左	読字力	読書力	絵画語い	受信	発信		
96	91	1級	読字 83%	81/89	読話 聴覚活用	口話	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自信を持ってしっかりとはっきり話す。</li> <li>・アイデンティティーの確立</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・発表の機会を多く持つようにする。</li> <li>・簡素にまとめて発表できるよう考えさせ、まとめてから発表させる。</li> <li>・大きな声でゆっくりはっきり話すようにする。 (教師側も大きな声でゆっくりはっきり話す。)</li> <li>・発音の苦手さを補う様々なコミュニケーションの方法を身に付けさせる。</li> <li>・自分一人で行動し成功する体験をさせる。</li> </ul>
			語彙 53%					
			文法 50%					
			読解 69%					

実態表を踏まえて、授業で工夫・改善あるいは配慮していること	結果・自己評価等
<p>(社会) 発表の機会を多く持つ中で、重要なことがらについてはまとめて発表できるようにさせる。授業のねらいを理解したかどうかをおさえるために、授業の最後に書かせて発表させる。</p> <p>(美術) 作品に対する思いや意図・感想などを発言する機会を多く設ける。発言した内容に対し、質問をして会話の幅を広げるよう心掛ける。伝わりにくかった所を再度発言させ、はっきり伝えるよう促す。</p> <p>(英語) 自信を持って、しっかりとはっきり話すことができるよう、発表の機会を多く持つようにした。その際、立って大きな声が出せるよう、プロジェクターやスクリーンを活用した。 “授業振り返りシート”を作成し、毎時間授業の最後に「今日の授業で分かったこと」「大切だと思ったこと」を書かせるようにした。</p>	<p>(社会) 重要な事柄は、赤字で文字カードを作り、授業中、授業の最後にカードをのけたり、裏返したりして確認をした。また、単語カードを使い、次時のはじめに確認した。単語は、よく覚えることができたが、文章になると丸暗記や正確に言えないこともみられた。計画通りに授業が進まず、授業の最後に本時のねらいを書かせることができないことが多かったので、授業内容の精選が必要であった。</p> <p>(美術) 授業中に発言する場面を多く設定する意識が高まった。自信なさげに話すことは多かったが、質問に対し即座に答えることができた。長い文章で答えることが今後の課題である。</p> <p>(英語) 発表の機会を多く設けることで「大きな声を出そう」と意識して発表している様子が見える。しかし口の開きや明瞭性などまだまだ不十分であり、継続した取り組み、支援が必要である。“授業振り返りシート”は、授業者への評価としてとらえることができ、本人の理解度を確認しながら授業を進めることができている。ただし、シートに書かせてその内容にふれるタイミングが次の授業では遅いので、できれば授業内に発表し、手立てを加えるというやり方も今後検討したい。</p>

## (エ) 研究授業の実施

全員が指導案を書いて実施する授業を年間3回（内2回は略案、1回は細案）実施し、細案の授業については中学部・高等部全教員で研究協議した。その中で生徒一人一人に対して学習活動の工夫、障害に着目した個への手だての工夫、教材教具の工夫を発表し、それらを含め研究協議を行った。

## エ 評価

- ・基礎的な研修を重ねることにより、聴覚障害に対する理解が深まった。
- ・実態表の作成にあたり、一人一人の生徒について中学部・高等部の教員が協議することにより、授業場面での基本的な支援について共通理解を得ることができた。
- ・各教科の特徴を踏まえた支援の方法について一人一人の教員が意識し実践するようになった。

## オ 改善

- ・研修に時間を掛けたために、実態表の作成に取り掛かるのが遅くなってしまった。研修の順番や時期、内容の精選など効果的な研修方法を考える必要がある。

## カ 成果と課題

### (ア) 成果

まず、「聴覚障害に対する理解が深まった」ということが挙げられる。特に高校から転勤したばかりの教員は、障害に対する知識がほとんどなかったが、聴力に関する知識とともに、聞こえないことでどのような困難が生じるかといったことも理解することができた。

また、一人一人の教員が授業の中で様々な工夫を行うようになったことが大きな成果である。視聴覚教材の使用はもちろんであるが、常に「理解できたかどうかの確認」を行うよう意識し、学習の定着を図るようになった。教員が話したことを生徒が同じように復唱したり、説明したりできるか確認する、「振り返りシート」を活用して自己の理解度を再認識するなどの活動が充実し、効果が上がった。

さらに、生徒のコミュニケーション面の特徴や、工夫した教材などの情報を教員間で共有することにより、連携が深まり、教科間でも相乗効果が得られた。生徒の学習状況を、日常的に話し合うことも多くなり、授業改善のアイデアが膨らむようになった。

### (イ) 課題

教員の意識は向上したが、生徒自身がすべての授業に対する理解度をどのように評価できたかについての考察が今後必要である。また、その授業時間内での理解はある程度の成果を上げたが、中学部から高等部卒業まで系統性を持って学習効果を向上させられるような指導方法の研究が課題である。

また、転勤等で教科担任が変わることも多く、引継ぎがスムーズにできる体制作りも今後の課題である。

## 5 成果と課題

### (ア) 教員の自己評価の結果から

『授業の評価（自己評価）』を配布し、1学期、2学期の授業について評価を行った。各学期のそれぞれの項目の平均点は以下のとおりである。

『授業の評価（自己評価）』の平均点

事項	評価の観点	平均 (n=26)	
		1学期	2学期
聴覚活用等	補聴器を装用しての聞こえの状況を確認している。	2.73	3.19
	教室の音環境や声の大きさ等に配慮している。	2.73	3.27
	視線の集中、発言の際のルールなど聴覚障害に配慮した授業規律を習慣づけている。	2.85	3.38
	談話しやすい話し方をしている。	2.88	3.46
指導目標	学習目標を適切に設定している。	2.73	3.31
	学習目標に到達できている。	2.42	3.12
発問・授業構成	学習の前提となる言葉や知識の理解の状況の評価するための発問を行っている。	2.42	3.12
	授業の内容理解の状況の評価するための発問（手だて）を行っている。	2.85	3.31
	自ら思考できるような発問を行っている。	2.58	3.31
	教員の発問や説明を、幼児児童生徒が正しく理解できている。	2.65	3.15
	幼児児童生徒の発言の意味や意図を教員が正しく汲み取れている。	2.65	3.27
	聞く・見る・書く・話す・考えるの活動がバランスよく配分できている。	2.27	2.96
言語指導	幼児児童生徒の発達や障害の状況、授業場面に応じたコミュニケーション手段を選択している。	2.96	3.46
	音韻を押さえ、言葉や文の意味が正しく理解できているか評価できるような読みをさせている。	2.58	3.35
	授業を進めていく上で必要な授業用語の定着を図るための手だてを行っている。	2.73	3.19
	文法の誤りについて改善を図るための手だてを行っている。	2.54	3.12
視覚的工夫	授業の流れが見て分かるように、板書を整理している。	2.76	3.23
	板書をノートに視写する時間を確保し、その状況进行评估している。	2.59	3.17
	実物・図・ビデオ等視覚的な補助教材や視聴覚機器を準備し、活用している。	2.92	3.46

全ての項目で、1学期の平均点よりも2学期の平均点が上昇している。様々な研修や授業改善に取り組んだことにより、教員の意識が少しずつ変わってきており、聴覚



障害のある幼児児童生徒への具体的な授業での配慮事項や支援の方法を実践したりすることができるようになったことが、得点の上昇につながったのではないと思われる。

反省や気づき、改善したい点等についての自由記述では、1学期の反省等として次のようなことが挙げられた。

- ・聴覚活用について、補聴器を装用しての確認や、声の大きさ等の配慮を怠っていたことが多かった。
- ・読話しやすい話し方ができていなかったのもっと口を大きく開けはっきりと話せるようにしたい。
- ・発問の質を高めたり、発問の仕方を工夫したりしていきたい。
- ・発問を工夫して生徒の考え・意見をもっと引き出したい。
- ・子どもの思考の流れが分かるような板書を工夫したい。
- ・藤本先生にアドバイスをいただいた視聴覚機器の有効な使い方について見直したい。

また、1学期は、子どもの実態を把握することに時間がかかったり、実態把握が不十分であったりすることを感じる教員がいた。

2学期の自由記述では、成果やよかった点についての意見が増えた。

- ・板書やノートへ書かせることなど、いつもより配慮するようになった。研究授業以外にもノートやワークシート、板書など他の先生との情報交換ができてよかった。
- ・子どものことや授業について教員間で話し合うことが増えることで、子どもを違った視点から考えるきっかけとなったり、他の教員の指導の工夫を知ったりすることができた。
- ・生徒がなぜつまずき、どこで困っているのかをより細かく見定め、それを他の教員とも共有し、複数の教科で改善を図るようにしている。

このように、教員間での情報交換や連携がより深まり、指導に生かせることを挙げる教員が多かった。

- ・第1回公開授業での藤本先生の御助言をいかして、改善を行ったところ、教室環境も整理され授業をする側も受ける側も動線が確保されすっきりとした。
- ・視聴覚機器を使う際の教室レイアウト等を考えて行うようになった。

第1回公開授業での藤本先生のアドバイスをいかし、視聴覚機器の整備、動線の確保等が図られた。

- ・教材研究を十分に行い、自ら発見したり、思考したりできるような発問を準備することが大事だと思い、板書計画や視覚教材の工夫を手掛かりに発問に対して自分で考えが進められるよう工夫した。

一方、反省点や今後改善していきたい点については、次に示すとおりである。

- ・子どもがしっかり考えられる発問を工夫していきたい。
- ・分かって欲しいという思いから発問や言葉掛けがあまりにもシンプルになっていたので、分かりやすさにも配慮しながらも年齢に応じた情報や言い回しも行っていく機会ももたないといけない。
- ・子どもが記録しやすい板書の工夫に取り組みたい。
- ・一人一人の理解の確認をしようと思えば、よほど教材を精選していないとプラン通りに終わらないので少ない教材で楽しく活動するための工夫を考えていきたい。
- ・学習活動のバランスをもっと考えたい。

発問や板書に関する内容は、1 学期でも挙がっており、学年や個々の発達段階に応じた発問の質や発問の仕方の工夫、子どもの思考の流れが分かるような板書の工夫等、今後も検討していく必要があると思われる。

## (2) 研究実践全般から

本校では、各部がそれぞれの子どもたちの実態把握に基づいた授業を考えるという視点で取り組み、実態把握のために研修、各種検査の実施やそこから得られたデータの分析等を行った。そして子どもたちの実態や授業についての話し合いの連携が深まり、授業に臨む際の私たち教員の意識改革が進んだように思われる。今後も部を超えた話し合いの場を設定し、各部の連携を図りながら、学校全体の方向性や系統性を持たせた授業の取組について考えていくことが必要である。

授業研究や校内研修を行うことで、教員の聴覚障害に対する理解が深まり、授業における基本的な配慮事項に気を付けるようになった。また、公開授業研究会で講師の藤本裕人先生から指導助言をいただき、聴覚障害のある子どもたちの授業における大切な視点を改めて認識したことが授業の工夫や改善につながった。子どもに応じてコミュニケーション手段を使用できるように、教員の手話の力を高める研修などを行い、今後も教員一人一人の専門性の向上を図りながら、授業力を高めていきたい。そして、分かる授業を展開することで基礎・基本の力を高め、生きる力を育んでいきたい。